

平成30年度自己評価表

鳥取県立鳥取聖学校

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>聴覚障がいのある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、自立と社会参加に向けて豊かな心とたくましく生きる力を育てる。</p>	<p>今年度の 重点目標</p>	<p>1 確かな基礎学力の定着を図るための学習指導の充実(学力向上) 2 自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実(たくましく生きる力の育成) 3 心身の健康と豊かな自己表現力の育成(心身の育成)</p>
---------------------------	--	----------------------	---

年 度 当 初				評 価 結 果 (2)月				
評価項目	評価の具体項目	現 状	目 標(年度末の目指す姿)	目 標 達 成 の た め の 方 策	経 過 ・ 達 成 状 況	評 価	改 善 方 策	
確かな基礎学力の定着を図るための学習指導の充実(学力向上)	(教務) ○個別の年間指導計画を指導と評価・改善に生かす。	○教科等の個別の年間指導計画を作成し、単元(小中高)や活動(幼)のねらいに対して、指導の反省欄を設けて指導の充実を図っている。教科ごとに「つまずきの記録」を取ることも定着し、また学部会や教科会等を通して幼児・児童・生徒の共通理解が進んできており子ども達の指導に活かす資料として機能しつつある。しかし、内容にばらつきや偏りがあることが課題である。	○「つまずきの記録」の内容のばらつきや偏りをなくし、個別の年間指導計画を指導、評価、改善に活用して、授業を充実させている。	○学部会や職員会等を通し、個別の年間指導計画の運用やつまずきの記録の意義について、共通理解をはかる。 ○「つまずきの記録」などの、個別の年間指導計画のよりよい記載方法について、教務部内で検討する。 ○「つまずきの記録」について、定期的に入力状況を確認し記載を呼びかける。 ○授業の反省や子ども達のつまずきなどの情報は、学部会・教科会などで共有化する。	○年計の評価の時期が長期休業中になり、時間的なゆとりが生まれ、学部内でしっかりと共通理解でき、評価に反映させることができた。 ○いろいろな意見が出て、共通理解ができよかった。 ○率の良い入力、確認ができた。 ○記入する内容を分かりやすい提示の仕方考えた。 ○児童の状況について学部で情報が共有できた。 ○「つまずきの記録」の記載方法について、教務部内で検討し、記録しやすい方向に進んでいる。 ○教科内での引き継ぎに活用されている。 ○学期毎に確認し、呼びかけることで記載漏れが少なくなった。	B	○年度初めの職員会や学部会などで具体的に説明し、教職員一人ひとりの意識の高揚を図る。 ○今後もゆとりを持って評価及び計画立案するために長期休業中に行う。 ○今後も学期毎に確認し、記載を呼びかけることを継続していく。	
	(研究) ○聴覚障がい教育の専門性の向上を図る。	○聴覚障がいのある幼児児童生徒それぞれの個に応じた指導を行うことが求められており、聴覚障がいに関する職員研修一人1授業や参観ウィークを行い、授業力の向上に努めている。	○ニーズに合った研修を企画する。 ○参観ウィークや研究授業の機会に全教員が他学部の授業を参観する。	○聴覚障がい教育に関する職員研修を計画実施する。計画の際は、教職員のニーズを抽出するとともに校内研究と絡めた内容を優先する。 ○他学部への参観ができるよう、各学部で参観計画を立てる。 ○授業評価シートを見直し、授業改善を図る。	○授業力向上事業や全体授業研究会各学部研究会の時に、講師を招いて指導助言をいただいたり、講演会を開催したりして、様々な研修を企画・運営した。 ○鳥取聖学校スタンダードによる、教師の授業に対する取り組みを2か月に1回程度自己チェックする機会を設けた。 ○一人1授業は、全職員が実施した。 ○研究授業の評価シートの項目は、各学部で取り組んでいる授業改善に結びついたものであることを確認した。 ○参観ウィークは、参観シートを改善したことで、短時間でも参観する教職員が増えた。他学部の教職員の参観があって良かった。	○来年度も引き続き新学習指導要領を踏まえながら、校内研究の推進を図る。 ○全学部で使用するチェック表としては、内容があわない表現もあり、見直しのためのアンケートを取っているところである。 ○一人1授業の時期が年度後半にずれ込むこともあるので、実施時期を各学部で再考する。 ○参観ウィークは、授業を参観する時間を調整するなど、学部体制で取り組む必要がある。	B	
	(研究) ○幼児児童生徒一人一人の実態やニーズを総合的・多面的にとらえ、一貫性と丸性のある指導と支援をAPDCAサイクルで行う。	○幼児児童生徒の数は少ないが聴覚活用や認知特性などの実態は多様であり、そこに起因するコミュニケーションや言語獲得・拡充の困難さがあり、また基礎学力の定着にも課題を生じている。	○各学部ごとにチームで幼児児童生徒の実態把握をし、指導方法や支援方法を検討する。APDCAサイクルによる授業改善を繰り返し、授業力を向上させる。	○各種発達検査や日常観察を通して実態把握をする。 ○学部研究会でテーマに基づき、「育てたい言語力や思考力」や「目ざす子どもの姿」について話し合う。 ○実態把握から個に応じた具体的な指導や支援方法を考える。 ○学部研究会を通して幼児児童生徒の実態や指導法について共通理解をし、授業改善を図る。	○【支援部】学部研究会で担当する子どもの支援方法を考えたり、構音研修会で助言をいただいたりして実践に活かした。 ○【幼稚部】評価シートや記録をもとに幼児の変容や指導支援方法の工夫について話し合いながら、研究に取り組んだ。学部研究会で意見交換をし、それを日々の授業実践、改善に活かした。 ○【小学部】学部研究会で発問に焦点を絞った授業改善の視点を整理した。児童が学習のねらいを理解し、より深く学べるようにするための発問の工夫について情報交換をしながら、日々の授業実践、改善に活かした。 ○【中学部】学部研究会や記録の回覧、日々の情報交換を通して生徒の実態把握や共通理解を行い授業実践、改善に活かした。全体授業研究会は中学部が担当し、事後研究会では各学部混合のグループで協議をした。中学部の研究はもとより、学部横断的に本校の研究を深め、各学部に還元できる有意義な意見交換を行うことができた。 ○【高等部】学部研究を意識して、日々指導に取り組んでいる。その視点を持ち、日常的に生徒の様子について情報交換を行うことで、何が課題で何を優先的に取り組むべきかなど意識して取り組んでいる。	○【支援部】 発音指導など専門性を維持、向上するための研修を引き続き行う。 ○【幼稚部・小学部・中学部・高等部】 今後も幼児児童生徒の実態把握や支援方法について共通理解を図り、授業改善の視点で振り返りながら授業実践をする。 ○【全学部共通】 今後も日々の情報共有を大切にし、取り組みを進める。	B	
(教務) ○個別の教育支援計画の運用に、キャリア発達段階表を連動させ、幼児児童生徒の支援を充実させる。	○キャリア発達段階表に連動した個別の教育支援計画の運用が軌道にのったが、キャリア発達段階表の活用状況は必ずしも十分とはいえない。	○ほとんどの教職員が個別の教育支援計画の運用に、キャリア発達段階表を活用し幼児児童生徒の指導に活かしている。	○個別の教育支援計画の運用等において問題点があれば、各学部の意見等を吸い上げ、個別の教育支援計画及び運用等をよりよいものへ改善していく。 ○学部会や職員会等を通し、キャリア発達段階表の扱い方・活用等について教職員の共通理解をはかる。	○子どもについて共通理解を図る際にキャリアの視点を入れた話し合いをするように努めた。 ○キャリア発達段階表の活用までは難しかったが、表の活用に向けて学部会で相談できたのは良かった。	○キャリア発達段階表の記入方法を簡素化し、より身近な発達の指標として活用できるようにする。 ○自立活動年間計画の内容と重複しないようにし、個別の教育支援計画の取り組みを明確にする。	B		
(総務・情報部) ○学校内外の広報活動を推進し、本校教育の理解と啓発を図る。  ○情報機器の適切な維持・管理に努めると共に、Ipad等の情報機器を用いたICT教育を推進し、生徒及び教職員の、社会人として必要な情報リテラシー(情報活用能力)の習得・向上を図る。	○手話啓発ポスターや校内掲示板での広報活動に物足りなさがある。もっと多方面に周知してもらおう方を模索する必要がある。 ○ICT機器の活用場面や内容の幅は広がってきたが、より有意義な活用の仕方の模索が求められる。また、ICT機器の活用に関して、教職員の日々の困り感を解消するための効率的な支援方法も併せて模索する必要がある。	○手話啓発ポスターと校内掲示板の広報手段の改善を行うことで、多方面への周知を促す。 ○ICT機器の活用に関して、教職員の日々の困り感を解消するために、より効率的な支援方法を設ける。	○手話啓発ポスターを掲示及び配布する場所の見直しと拡大を図る。校内掲示板に関する情報や一見の促しを、ノーツの掲示板等を活用して行う。 ○昨年同様、情報研修会の事前に教職員のICT機器の活用に関するニーズをアンケート等で把握し、それに即した研修会の内容を設定する。また、日々のICT機器等に関する困り感に対しては、専門機関との仲立ちをしながら、ノーツ掲示板での情報提供、総務・情報部員による個別のニーズの聴きとりやアドバイスなどで、課題解消のための支援を行う。	○校内掲示板に、幼児児童生徒の学習の様子の写真を定期的に掲示することができ、充実した情報発信になった。また、手話ポスターは学校公開期間中も含め常時校内に掲示したり、近隣の公民館などに掲示していただいたりすることができ、手話の啓発に繋がった。 ○Ipadと電子黒板を繋ぐ変換機とケーブルを各教室に常備して欲しいという職員のニーズに対応し、機器を配備することができた。また、職員パソコンのバージョン更新やスキャナ等のソフトの不具合改善などについて、職員が困らないように事前に具体的な情報を提供することができた。	○校内掲示板の運用に関しては、今年度同様定期的に子どもたちの学校生活の様子を写真やイラスト等で紹介していく。また、手話ポスターに関しても早めの準備と可能な範囲で様々な場所で紹介及び掲示をする。 ○今年度同様、情報機器の適切な維持・管理に努めながら情報機器に関する職員のニーズに丁寧に対応していく。また、ICT教育の推進に関しても情報リテラシーの習得・向上を目指した様々な企画を計画実施する。	A		

<p>自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実（たくましく生きる力の育成）</p>	<p>(生活安全部) ○学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画を基に、心身の健康、交通事故や災害からの安全確保、健康的な食生活について理解を深め、健康で安全な生活習慣が身につくように日常的に幼児児童生徒の実態に応じた指導を行う。</p>	<p>○学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画を3本の柱として、心身の健康、交通事故や災害からの安全確保、健康的な食生活について様々な行動を計画し、生活安全部の職員、学級担任を中心に指導を行っている。</p>	<p>○心身の健康、交通や災害からの安全確保、健康的な食生活について理解を深め、健康で安全な生活習慣が身につくように日常のかつ継続的に指導に取り組み、幼児児童生徒の実践力の向上を図る。</p>	<p>○学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画の中から本年度の重点取組項目を8項目決定し、事前の打ち合わせと事後のアンケートや部会による振り返りを通して、課題を明確にし、その後の取組に活かせるようにする。</p>	<p>○各年間計画に従って学習、行事に取り組んだ。 ○不審者対応訓練では、不審者が校内へ侵入したときに職員がとっさに行動がとれるよう、より実践的な訓練内容へ見直しを行った。問題点を全職員で話し合い、子どもたちを守る体制や安全設備の見直し、施錠のできる部屋の配置についても検討した。 ○各教室の鍵や飛散防止フィルムの導入、熱中症計の数を増やすなど、幼児児童生徒が快適に学校生活を送ることができるよう取り組みを進めている。 ○JR、バスでのマナーアップ活動を行った。また、交通安全週間にバス停で安全指導を行った。 ○歯科検診後に、対象児童生徒への個別指導を行った。</p>	<p>○アンケート集約を元に、交通安全教室や災害に対する避難訓練をよりよくし、また全校遠足や職員研修が充実したものになるよう部会内で具体的に話し合い、来年度の改善へつなげていく。 ○今後も安全装置の整備や訓練内容の見直しなど、具体的な取り組みを進めていく。 ○JR、バスでのマナーアップ活動は新しい試みなので、しばらく継続して様子を見ていく必要がある。今後も継続する。 ○検診後の対象児童生徒への個別指導は継続したい。</p>
	<p>(進路) ○キャリア教育や進路に関する情報を発信する。 ○実態や発達段階に合わせて、社会人として必要な力をつけていけるようにする。</p>	<p>○各学部で取り組まれているキャリア教育の内容が他学部要充分に伝わっていない。 ○最新のキャリア教育の動向について知る機会が乏しい。 ○卒業生の状況について知る機会が少ないため幼児・児童・生徒に還元して十分に活かすことが難しい。</p>	<p>○進路だよりを発行し、各学部のキャリア教育取組状況の共通理解を図る。 ○最新のキャリア教育についての研修会の内容や進路担当が発信する情報を活かして幼児・児童・生徒の指導や支援を確認・工夫・改善している教職員数6割をめざす。 ○先輩の話を聞く会や生徒向けの進路研修会の内容を指導や支援に活かしている教職員数6割をめざす。</p>	<p>○毎月、進路だよりを発行する。 ○キャリア教育研修会を実施する。 ○掲示板等で「求人状況」や「進路に関する最新情報」を発信する。 ○中高等部が実施する「先輩の話を聞く会」や高等部の「進路研修会」の内容をDVD回覧等で他学部の教職員にも周知する。</p>	<p>○ほぼ毎月、進路だよりを発行し、各学部のキャリア教育の取り組みや進路関係の行事の報告をすることができた。 ○県教委の奥田指導主事より最新のキャリア教育について全職員が研修を受けた。 ○学校に送られてくる進路関係の情報はその都度発信した。 ○進路研修会のビデオ撮影については講師の承諾を得ることができなかったため、DVD回覧ができなかった。</p>	<p>○進路だよりに記入欄を設けてはいるが、保護者の意見や感想を吸い上げにくいので、個別に聞いたり保護者研修会等で呼びかけたりする。 ○今後も職員のニーズを吸い上げて研修の内容を考える。 ○今後もノーツ掲示板や進路室前の掲示等で情報発信する。 ○研修会に参加できなかった教職員については進路便り等で情報発信する。</p>
<p>心身の健康と豊かな自己表現力の育成（心身の育成）</p>	<p>(自立活動部) ○自立活動の指導を円滑かつ効果的に行うことができるよう、環境や教材教具、年間指導計画の整備に努めるとともに、専門性を高めるための職員研修を行う。</p>	<p>○発音、言語、聴能に関する職員研修を行っている。 ○補聴環境の整備のため、聴能関係の道具の管理や点検、補聴器店による定期点検の日程調整を行っている。 ○自立活動の指導に関わる教材教具の整理や、教科と自立活動の関連が記録しやすい年間指導計画の使い方を提案し、2年目を迎える。</p>	<p>○職員一人一人が、自立活動（聴覚障がい）に関わる専門性を高め、学校全体で教材、教具を共有、活用し、教科の枠を越えて、自立活動を踏まえた指導にあたる。</p>	<p>○補聴環境の整備のため、聴能関係の道具の管理や点検、補聴器店による定期点検の日程調整を行う ○自立活動の専門性を高めるための全体研修会を年3回、経験や指導の頻度に応じた発音指導勉強会を年5回行う。 ○学部を越えて、教材教具を共有できるように、教材フォルダの整理や教材教具の管理を行うとともに、管理場所の一覧表を掲示する。 ○教科と自立活動の関連が記録しやすい年間指導計画を実際に使って指導を行い、必要に応じて、より使いやすい形に改善していく。</p>	<p>○補聴環境の整備のために、東神補聴器店（毎月1回）と補聴器サービス店（2か月に1回）に来院していただき、定期点検を行った。 ○1月の言語研修会（講師：長南先生）では、各学部の授業場面を参観していただき、本校におけるコミュニケーション手段の特徴や子どもの実態を踏まえた言語指導に関わる助言を受けた。 ○1学期終了後に挙げた様々な意見をはじめ、2学期には各学部の意見を集約し、より簡潔に記入しやすい形式になるよう協議したり、修正を重ねたりし、3学期は修正案（形式）を再提案した。</p>	<p>○補聴環境のさらなる整備のために、定期点検は継続していく。聴力測定室の環境をSTの助言を取り入れながら、より適切な設定を行う。 ○言語研修のアンケートでは、キューや手話のそれぞれの特徴を理解できたという声が開けた。来年度も、様々なコミュニケーション手段の特徴やその使い方に関わる言語指導に関わる定期的な研修を企画する。 ○今後も、新たな意見が挙げれば、その意見を踏まえて、新年度までに修正を重ね、使いやすい形式に仕上げる。</p>
	<p>(生活安全部) ○児童会・生徒会において、児童・生徒が計画に基づいて見通しを持って活動していけるように指導・支援する。</p>	<p>○児童会・生徒会役員になった児童・生徒は、その責任を果たそうとしている。話し合いにおける活発な意見交換や見通しを持って活動を進めていくこと、また個々の意見を取り入れてより良いものにまとめ上げていくことについてはまだ教職員の支援が必要である。</p>	<p>○児童・生徒が自ら計画を立て、児童会・生徒会の運営を行う。学校生活の充実と向上のために問題を協力して解決できるように生徒会長や生徒会役員を支援する。</p>	<p>○児童会・生徒会の年間計画を作成する。役員の児童・生徒を中心に話し合いを行うときは、話し合いの進め方に関する助言を行ったり、具体例を提示することで生徒が選択や決断を下すことができるよう支援を行う。</p>	<p>○児童会では教員の助けを借りながら、2人の上級生が下級生を引っ張って毎月の目標を考えたり、係の仕事を決めて活動したりする様子が見られた。生徒会においては年間計画を作成し、生徒同士の活発な意見のやり取りや、前向きな話し合いができるよう支援した。仕事分担や週番活動も相談し、全員参加で行う姿が見られた。 ○全校遠足では生徒会で新しいレクリエーションを企画し、教職員の助言を受けながら準備し、全校で楽しむことができるよう工夫を凝らした。 ○中ろう体に向けて各自が目標を設定し、苦手な部分を重点的に練習できるよう支援を行った。生徒は最後まであきらめずに目標達成に向かって頑張る姿が見られた。</p>	<p>○今後も引き続き、児童・生徒を中心とした活動を行い、様子を見守りながらよりよい話し合いができるように助言や支援を行う。また、球技大会や卒業生を祝う会の運営も生徒会主体で行えるよう、支援を行う。 ○生徒会主体でバス停の清掃を現在企画している。鳥ろうっこいきいきプロジェクトなどの時間を使って、地域に貢献できる活動を目指していきたい。 ○来年度の中ろう体に向けてそれぞれがより高い目標を立て、意欲的に活動に取り組めるようにする。</p>

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%） C：変化の兆し（60%） D：まだ不十分（40%） E：目標・方策の見直し（30%以下）